

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

## 高倉新一郎先生小伝 抜粋特別号

(ボランティアニュース No. 49～52 号から抜粋)

\*\*\*\*\*

第1回	ボランティア ニュース No. 49	2018.06	-----	1
第2回	ボランティア ニュース No. 50	2018.09	-----	4
第3回	ボランティア ニュース No. 51	2018.12	-----	7
第4回	ボランティア ニュース No. 52	2019.03	-----	11

### 特別寄稿

## 高倉新一郎先生小伝－息子が語る高倉新一郎（1）ご先祖と祖父高倉安次郎

公益財団法人ふきのとう文庫代表理事・北海学園大学名誉教授 高倉 嗣昌

### 1. 高倉家のルーツ

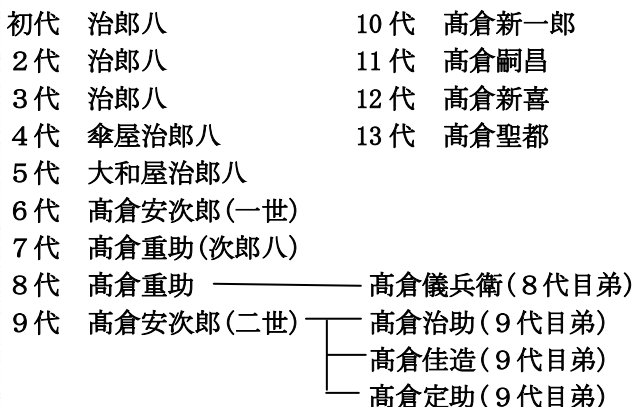
遡りますと、先祖は滋賀県の東海道宿場町近江土山にたどり着きます。代々の檀家寺常明寺の過去帳に抛れば、街道筋で商家を営んでいた「治郎八」が「元禄7年（1694年）正月晦日に死去」というのが最初の記録です。

これを初代とし、以後代々当主は次郎八と名乗って来ましたが、4代目には「傘屋次郎八」とありますので、多分傘屋を営んでいたのでしょう。

家が大きく発展したのは5代目で、旅籠を開き（屋号は大和屋）、併せて茶の栽培にも乗り出しており、宿場役人も務めたようです。

ただこの5代目は、後継男子を得ぬまま配偶と死別、高倉姓の小藩（近江）の武士と死別（死亡時は浪人）した子連れ的女性と再婚し、結局この連れ子が6代目を継いで高倉安次郎（一世）と名乗りました。新一郎の父安次郎にはその父8代目重助が6代目を意識して名付けたようです。

#### 高倉家系図



### 2. 祖父高倉安次郎

#### (1) 北海道移住まで

高倉安次郎は、高倉重助・すまの長男として明治6年（1873）年11月に誕生しました。しかし、

\* タイトル「高倉新一郎先生小伝」は、編集委員会による

\*\* 高倉嗣昌：1937(昭和12)年札幌生まれ。北海道大学経済学部修士課程修了後、同大学教育学部助手、助教を経て、同医療技術短期大学部教授の後、北海学園大学教授となり退職。1982(昭和57)年財団法人ふきのとう文庫と出会い、理事・副理事長を経て、現在公益財団法人ふきのとう文庫「子ども図書館」代表理事。



写真1 「高倉商店」のにぎわい

半商半農の家業は鉄道に見放された地域として極めて厳しく、早くから函館で商売をしていた高倉重助の弟高倉儀兵衛を頼って渡道して来ました。叔父の下で商いの手伝いをする中、間もなく店の支配人格となりましたが、叔父の持ち船の遭難で閉店を余儀なくされたのです。それで北海道奥地への進出を目指すこととなりました。

近江土山の人々に呼びかけて団体入植を図るべく、北海道庁に出向いたところ十勝入植を進められ帰郷、しかし団体入植はうまくいかず、隣の宿場町水口の商家の娘森島かつと結婚、新妻を伴い単独で明治32(1899)年帯広に移住して来たのです。

## (2) 帯広時代

戸長役場が置かれて間もない下帯広(現帯広市)で、今の大通南6丁目地に広く雑貨を商う「高倉商店」を開きました。順次商域を広げ雑穀・肥料なども扱い、商業に留まらず農業との繋がりも強めていきました。

併せて「北海道国有未開地処分法」により帯広村に接する音更村西部に170haの土地の無償貸与(成功後に無償付与)を受け、そこに小作人を入れ開墾事業にも当たっています。他に2ヶ所(うち1ヶ所は石狩管内新篠津村高倉地区)の開拓の権利を得て一時は、数千ヘクタールの地主だったこともあったようです。これら開拓地は全てうまく行ったわけではありませんでしたが、音更の地は成功し、大正期には早くも小作地を開放しています(今の音更町高倉地区)。

更に、当時十勝の奥地であった野付牛(現在の北見市)にも進出、市街地区画分譲会社を設立しています(町に学校用地を寄附していたようです)。

安次郎は関連事業の人々を繋げる企業家、組織者として、十勝の多くの農商業関係組織の結成、会社設立、工場誘致に力を発揮しています。例えば、「十勝農産業組合」・「北海道東部雑穀共同組合」等の結成、「帯広倉庫」・「十勝石材軌道」等の会社設立、「北海道精糖工場」の誘致などがそれです。中でも現存の有力企業である「帯広信用組合(現帯広信用金庫)」の創設理事長となっています。

政界にも打って出て、北海道議会議員を経た後、衆議院議員に立候補しました。巷の話によると、当選は絶対確実ということで同じ党派の複数当選を狙ってその人への投票を呼びかけたために僅差で落選してしまい、政界への道は挫折となりました。

## (3) 安次郎の3人の弟

これらの仕事を一人で取り組んだわけではありません。安次郎には3人の弟がいましたが、3人とも兄の後を追って十勝に来てそれぞれ事業に協力しました。

・次男 高倉治助

あまり強く自己主張はせず、事業を広げ飛び回っている安次郎に代わって手堅く高倉商店の経営に当たりました。先述の帯広信用組合の2代目理事長も務めています。

・三男 高倉佳造

次男治助に似て手堅い性格で、帯広町西部に牧場を開いて当時草分け的酪農業に従事し、十勝初



写真2 8代目高倉重助と4人の息子  
前列左から高倉安次郎・重助・治助、  
後列左から佳造・定助



写真3 高倉安次郎の胸像と  
盛大な除幕式  
まん中の子も:松浦 昭  
その左:高倉安次郎・かつ  
子どもの右:高倉新一郎・とき

の練乳製造所を設けたりしています。後に北海道酪農組合連合（後の雪印乳業）の設立に加わり、その理事などの役に就いています。

・四男 高倉定助

安次郎に似て能動的な性格で、安次郎が受けた開墾地に入植し、直接開墾に従事しつつ開拓地を差配し小作人を監督することで、先述の高倉地区の基礎を築きました。後に十勝を地盤に北海道議會議員となり、更に衆議院議員にも3回連続当選し、議員引退後十勝清水の町長を務めています。

4人とも十勝開拓に大きく貢献し、安次郎は帯広市中心部の十勝会館前（当時、今はさかえ児童公園）に、胸像が建てられています。

（4）札幌時代

安次郎は大正5（1916）年、札幌に出て来ました。当時十勝の各地で起こった電気事業会社の多くの設立に関係し、それが全道的に統合された時の権利売却金がかなりの額になったらしく、それを携えて来たのです。当時北海道帝国大学の地所に建っていた民家を買ひ、応接間と座敷を増築して住みました。その地こそ現在私が住んでいる所で、当時北海道帝国大学の教授が集中して住む通称「博士町」と呼ばれたど真ん中でした。

札幌では一大事業に乗り出しました。阪急電鉄の小林一三型地域開発のように、現在の札幌市中央区界川・双子山の一带の広大な土地を確保、分譲住宅地として販売するのと平行して、定山溪か

ら土管ではるばる湯を引いて温泉ホテルや遊園地をつくり、加えて「札幌郊外電気軌道」という線路を敷いて、リゾート開発等に挑みました。

しかし、まだ札幌の都市規模は小さく経営が厳しかったうえに、定山溪の湯元が水害で壊滅し、数年経たずして倒産してしまいました。

現在地の土地家屋も人手に渡り（後に新一郎が回復）、以後安次郎は借金を背負う隠居生活を送ることになってしまいました。

そうした中、安次郎の最後を飾るビックイベントが先述の胸像除幕式でした（胸像のその後については後述）。昭和8（1933）年3月のことです。私が誕生する4年前で、除幕は新一郎の妹みちの長男、松浦 昭（故人）がやりました。

元々高血圧であった安次郎は式の間立っていたのが応えたのか、間もなく倒れそのまま再起できず、嚥下機能の低下による異物性肺炎でその年の12月に61歳で他界しました。地元紙の「十勝毎日新聞」では『悲しき雪の日、巨星墜つ』という見出しの号外が発行されたようです。

（5）高倉安次郎の人間像

私は祖父を全く知りませんが、伝聞で描いているイメージを最後にお話します。

一口でいえば、近江商人の商才を発揮した典型的な明治の実業家だったと思います。

スケールが大きく、並外れて気前がいいこと（例えば、人力車夫やポーターへのチップ）、太っ腹で



同郷の人や親戚のめんどろをよく見たこと、人に呼びかけてまとめて行く才覚等があげられましよう。

その反動とも言うべきか、奔放な面も目立ちます。健康に無頓着で、四十代から高血圧、軽く当たったこともあったようですし、当時の実業家に

は当たり前とも言われていた妾も囲っていました。

高倉安次郎は「北海道百年」の記念出版物『開拓に尽くした人々』の100人の中に入っていますが、3人の弟、息子新一郎の業績と関連させてか、「幸せな失敗者」と総括されています。

(続く)

## 特別寄稿

### 高倉新一郎先生小伝 -息子が語る高倉新一郎(2) 学者 高倉新一郎

公益財団法人ふきのとう文庫代表理事・北海学園大学名誉教授 高倉 嗣昌

#### はじめに

私も終始大学に所属し研究生活を送って来た人間の端くれでしたし、専門が社会科学系でしたので、学者高倉新一郎と共通する領域や舞台が少なからずありましたが、広く活動した新一郎の全貌を描き出すことはとてもできず、私の視野に入ったごく断片的な記述に留まることをお許しいただかねばなりません。

高倉新一郎は1902(明治35)年11月23日、十勝帯広の地で商店を経営する高倉安次郎・かつの第2子、長男として誕生しました。戦前の皇室行事《祭日》だった新嘗祭にいなめに生まれたので新一郎とつけたようです。

#### 1. 学者への道

商家の跡取りであり、はじめから学者を志していたわけでなさそうです。

学者高倉新一郎を生み出した動機は主に三つあったと思います。

第一は、尋常小学校卒業期に、帯広にはまだ旧制中学校がなく、札幌一中(今の札幌南高)を受験し、その年帯広から唯一人合格して札幌に出て来たことです(写真1)。

第二は、それをステップとして、北海道帝国大学予科に入学したことにより「学問の府」に飛びこんだことです。

第三は、父安次郎が起こした事業を継ぐ立場か

ら、1923(大正12)年当時北海道帝国大学で唯一の文科系部門であった農学部農業経済学科に進学したのですが、父の事業が不安定で進路が定まらない中、指導教授であった高岡熊雄先生(後に第三代総長)の勧めもあり、大学に残ったことです。



写真1 庁立札幌第一中学校  
2年生の頃(1917年11月)

#### 2. 博士論文「アイヌ政策史」

##### (1) テーマを選んだ動機

帯広時代、叔父高倉佳造が開いていた農場の近くにアイヌ人の集落があり、そこに住むアイヌの人々の貧困を目の当たりにして、「民族問題」に関心を持ちました。

##### (2) 博士論文をまとめ認められるまで

大学の卒業論文は「北海道旧土人政策の研究」(1926年)で、この頃からテーマ設定ができていたと言えます。

北海道帝国大学助手になりましたが、同大学図書館の司書官を併任し、歴史上の文献に接し易い立場に就くことができましたので、こつこつと北海道に関係する古文書の解読などに取り組み研究

\* タイトル「高倉新一郎先生小伝」は、編集委員会による

を蓄積していきました（現在私が保管している新一郎の研究ノートは膨大なものです）。

### (3) 博士号の授与

博士論文として「アイヌ政策史」を北海道帝国大学農学部農業経済学科に提出しましたが、拓殖政策が主なテーマの学科で歴史研究を正面から評価できる人が存在せず、「お蔵入り」の状態になりました。

一方勧める人があって1942年、それを出版しましたところ反響がありました。

特に当時東京帝国大学の東畑精一教授から、「歴史的に異民族との関連を研究したものが少ない中、他民族との交渉が緻密に描き出されている論文は大変貴重」という主旨の評価を得たのです。

農業経済学科としても放っては置かず審査に至り、1945年に学位（農学博士）授与となりました。

### (4) 「アイヌ政策史」のその後

新一郎の学者としての登竜門となったこの論文の評価は、その後曲折をたどります。

「アイヌの民族問題」を正面からとらえた先駆的な論文としての位置づけは定着していると思われませんが、その後民族問題の見方や解釈が大きく変化し、今日目から見ると積極的評価ができない面があることは事実です。

1972年、初版本が大変ミスプリントが多かったため、本人の強い希望もあり、再販されたので又注目を浴びる機会もありました。

本人が他界した1990年以後、「高倉新一郎著作集」（全12巻）が次々と刊行されましたが、第5巻「アイヌ政策史」の「解題」をめぐって行き詰まり、停止したままになっています。

他方、アイヌ人及びその文化に対して愛情を注ぎ、早くからその保存や継承に力を入れて来たことは評価されていると思います。

### (5) 評価に対する本人の反応

これに関連して、新一郎の苦悩を表す二つのエピソードを書かせていただきます。

① 「アイヌ政策史」のダイジェスト版が翻訳されそれを讀んだアメリカ研究者に新一郎が面会したとき、最初の質問が「あなたはアイヌの血を何%引いているのですか？」でした。「多分0%だろう」と答えたら相手は怪訝な顔をした

のでドキッとしたそうです。自分の民族の研究をするアイヌ人研究者は大変希少な状態で、和人がいかにアイヌ人文化や教育を抹殺してきたかを改めて実感させられた」と語ったことです。

② アイヌ文化を広く紹介する共著の本を出版したところ、その中の一枚の写真に写っていたアイヌ人女性から肖像権侵害を訴えられ、あるマスコミから「民族の悲しみを忘れたか！」と批判された時（裁判では和解一事実上の敗訴）、ポツリと「長生きはしたくないな」と言ったことです。

## 3. 学識経験者 高倉新一郎

### (1) 郷土史研究者としての飛躍

博士号の取得は新一郎の研究生活の中では一部にすぎず、それらが総合的に認められて1949年北海道新聞文化賞を受賞したこともあり、その知名度を高めて行きました（写真2）。

とりわけ北海道の歴史、郷土史に関連する人々から広く認められ、「北海道の郷土史と言えば高倉」のイメージが定着していきました。

現に一連の「北海道史」をはじめとする道内の多くの地方史の編集委員、監修者、顧問、序文の執筆等の役割を務めています。

やがて北海道内郷土史研究者のまとめ役と後継の育成指導にあたるようになりました。その代表的存在が「北海道史研究協議会」です。



写真2 北海道新聞文化賞受賞記念  
(1949年11月自宅書斎にて)。  
右から父新一郎、嗣昌、母とき



写真3 古文書解説講座（1977年10月、道庁赤レンガ庁舎にて）

## (2) 民俗学、文化財保護活動等への進出

新一郎はアイヌ文化の発掘や保存への造詣を深め、評価されて来ました。

民俗学の大家柳田國男さんとの親交もあり、戦後間もない頃、現存する高倉旧宅に宿泊されたことを覚えています。

又、太平洋戦争末期の1945年に、「満蒙（現在の中国東北・内モンゴル地区）民俗調査」を命ぜられ出張しています。よく無事に帰って来られたものです。

戦前、北海道帝国大学「北方文化研究室」（後の北海道大学付属図書館北方資料室）の発足時のメンバーとなり、戦後は、道や市等の文化財保護委員・専門委員を長年にわたり務めたり、北海道開拓記念館（当時）の設置に深く関わる等の文化施設づくり、千島列島研究を通じ、歴史的に確かな裏付けを持った「北方領土問題」を手掛けてその返還運動に加わったり、全道各地に出かけて「古文書解説講座」の講師を務めるなど新一郎の専門領域に関連した公職もかなりの数になります（写真3）。

又、新一郎は天皇や皇太子が来道されたおり、昭和天皇、今上天皇の皇太子時代、現皇太子（いずれも、本文執筆当時）の三代にわたって、北海道の歴史や文化をご説明する役割の荣誉に浴しています（写真4）。

## (3) 多彩な役割に就く

新一郎が関係した「単行本」は優に百冊を超えていますし、論文、感想文、書評、座談会の収録



写真4 皇太子殿下（今上天皇-執筆当時-）に北海道史資料についてご説明（1956年）  
左は北海道知事田中敏文氏（当時）

など数えると一千近くに及び、内容も歴史や民俗学域を超えて多様です。

専門分野に限らず、頼まれたらまず断ることがない性格のせいか、仕事をした範囲は簡単に整理がつかないほど広がりがあり、「間口の広い高倉さん」と新聞に書かれたこともありました。

公職を見ても、いちいち職名は書きませんが、北海道の総合開発関係、農業関係、労働・賃金関係、生活・物価関係、福祉・保健関係、暴力追放・青少年育成関係、広報関係等の他、文化賞の審査・選考、記念事業の企画なども多数あります。

民間組織の関係でも、道内で活躍した先覚者や外国人の顕彰活動、民間組織の歴史編纂、道内民間研究組織の長やメンバーに名を連ねています。

## 4. 学派、学会、お弟子さん

### (1) 高倉新一郎の「学派」

私が北海道大学経済学部の学生だった時、丁度新一郎は経済学部の教授（学部長）でした。その頃の経済学は、マルクス経済学・近代経済学の二者択一的流れがあり、学部移行時の教官紹介の機会に、司会の先生がどっちに属するかが披露されました。父に順番が廻って来た時、そのどちらとも言えないドイツのワグナーやブレンターノに代表される「歴史学派」であると話され、それまで父の学派など深く考えたこともなかった私は「オヤッ」「なるほど」と思った次第です。

父が研究者として駆け出しの頃はマルクスを読んだだけでにらまれる時代で、とくに左翼運動を



したわけではないのに「特高警察」に監視されていたことがあったようです。若い頃の父の立場を垣間見ることができるエピソードでしょう。

## (2) 学会活動

父の学会活動を私は殆ど承知していません。しかし社会経済史学会や土地制度史学会などでは、かなり活躍していたことは知っていました。

私が学会活動を通じて父の存在を実感したのは、年代がずれていて一緒にはなりませんでしたが、北海道社会学会の会員としてでした。

その学会の席上で、「北海道に『村落共同体』はあるのか？」が議論されたことがありました。その過程で、「高倉新一郎先生は『北海道に村落共同体はなかった』と言っておられましたが・・・」という発言があり、それ以後誰も何も反論せず、議論にならなかったもので、父の学者としての発言の重みを感じたものです。

## (3) お弟子さん

新一郎は一貫して大学教育、それも殆どの期間を北海道大学農学部にて在職しておりました関係で、農業経済関係の学会で重きをなす学者、研究者を名前をあげればきりが無いほど多数「育成」して来たことは確かです。

しかし新一郎の「北海道史学」とでも言うべき領域を受け継いだ「直弟子」は多くありません。殆どは師弟関係というより、「研究仲間」に近かったのではないのでしょうか。

「直弟子」としてまず頭に浮かびますのは、私も北海道大学大学院経済学研究科で直接指導を受けましたが、父の出身学科の後輩でもある林善茂北海道大学名誉教授です（経済学部での担当科目は「北海道経済史」）。

(続く)

## 特別寄稿

### 高倉新一郎先生小伝 -息子が語る高倉新一郎 (3) 人間 高倉新一郎

公益財団法人ふきのとう文庫代表理事・北海学園大学名誉教授 高倉 嗣昌

#### はじめに

誰でも成長の過程でその人のパーソナリティ形成に影響を及ぼした要因は多々あるのですが、高倉新一郎の場合、強く考えられるものを順不同で列記してみました。

1. 明治という時代
2. 開拓途上の十勝の大地
3. 父高倉安次郎、母かつ
4. 高倉商店と近江商人魂
5. 帯広小学校
6. 札幌一中
7. 北海道帝国大学時代の学友、研究仲間
8. 北海道帝国大学時代の恩師

#### テーマ別人間像

##### 1. 健康

本人は若い頃あまり丈夫ではなかった（旧制中学五年まで行った原因の一つ）と言っていますが、開拓途上の極寒の地十勝で育っただけあって、野性味があり、なんでも食べ、晩年こそ、交通事故に遭ったり、高血圧・前立腺肥大・腎盂炎等に悩んでおりましたが、極めて健康に見えました。

ラフに見える反面血液型はA型で、大変緻密なところもありました。

米寿のお祝いをするまで生き、死因は以前から医師が予言していた虚血性心不全でした。

\* タイトル「高倉新一郎先生小伝」は、編集委員会による

## 2. 少年期の家庭生活

中学で札幌に出て来て親戚宅に下宿しましたので、少年期の家庭生活は小学校卒業までです。

家が商店だったため大変忙しく、年端も行かぬ子守の背中に一日くりつけられていることが多かったせい、二人の弟は夭折しています。その中で生き残ったわけです。

食事もいつもバタバタした中だったらしく、マナーなども殆どないに等しかったことは長じてからの食物の食べ方を見てもわかります。

## 3. 学業成績

学業成績にも起伏がありました。帯広から札幌一中に合格したのは良かったのですが、中学校低学年の頃は授業について行けず、進級が危ぶまれたようです。それをなんとか乗り切り、その後は中学五年まで行ったことで、帝国大学予科の時になるとかなり余裕があったと語っています。

## 4. 兵役

徴兵検査では近眼だったため、乙一種合格だったようで、急に召集は来ないと判断し、兵役志願をしなかったのです。もし召集されれば、幹部にはなれず一兵卒からだったのですが、結局「赤紙」は来ませんでした。

## 5. タバコ・酒

タバコは若い頃いたずら程度に吸ったことがあるようですが、私が見たのはけむたそうに吸っていた一度だけです。

酒となりますと、若い頃ビヤホールの大樽を空にしたという「伝説」もあったようですが、私を知る限りでは酒好きですがあまり強くはありません。飲むとワーと能弁になりコトツと寝てしまうことが多かったです。

自宅での個人的な酒は、九才年上で兄貴のような叔父高倉定助と飲んで気炎をあげていました。

私が家族や一族以外で父と飲んだのは、学生の頃ゼミ合同コンパの時、学生多数で二次会にスキノまで行き、奢ってもらったことが一度あるだけです。

## 6. 話術

それと関連した話術ですが、歴史学者だったこともあり、個人的に聞く話は大変面白いのです。しかし父の講演や講義を聞いた限り、弁が立つとはとても言えず、学生の立場から見て授業は下手だと思いました。

## 7. 勝負事

競馬、パチンコはもとより、囲碁やマーじゃんは全くやらず、一度私と将棋の相手になってくれたことがありましたが、強いとは思えませんでした。

## 8. 趣味・スポーツ

ゴルフなどは全くやらず、運動会等で活躍したという話は知りません。趣味でも一般的な際立った趣味があったわけではありませんが、二つ思い浮かびます。

一つは植物採集で、中学五年の時にはそれを相当やっており、進学したら植物学の方に行こうかと思ったこともあったようです。

私に植物標本の作り方を教えてくれ、出来た標本の名前を図鑑を見ないで教えてくれました。

もう一つは動物の立体切り絵です。これは相当の腕前で、宴会の余興になどでやっていました。戦争で玩具がなかった時、私にせがまれてよく切ってくれました切り絵は三十種類ぐらいになったでしょうか。紙が欠乏していた時代、素材として高倉安次郎の事業倒産により無価値になった株券を使っていました。

## 9. 本と読書

学生時代、私は同級生から「お前のおやじさんは猥本なんか読むのか？」とよく聞かれたものです。

文献研究者ですから扱う書籍類も莫大で、書斎の床がぬけたぐらいです。多くの時間文献と向き合う暮しにして、趣味として読書をしている父を意識したことはありません。目にする大衆雑誌という『オール読物』ぐらいでした。したがって通俗的な卑猥な本はなかったのですが、「性文化」



などを描き出した民俗学的な領域の相当きわどい本はありました。

## 10. 女性

父は「眼鏡美男」でしたので、持てたと思いますが「女性問題」は知る限り一切ありませんでした。しかし、郷土史研究で指導を受けに来る女性は少なからずいて、巷に噂が立ち母が神経をとがらせていたことは覚えています。

## 11. 経済観念と商才

商家で育ったのですが、経済的には鷹揚でお金に目端が利く方ではありませんでした。他方、父の葬儀は一学者の葬式ではなく、「実業家」の葬式だったのです。それは、父が今日の「COOPさっぽろ」の創設者だったからです。

そのきっかけは終戦後間もない頃、北海道大学の学生部長を務めていましたが、その当時の島学長から、「学生の福利厚生になるものが何一つないので、なんとかしてほしい」と言われて、学生生協を立ちあげたことです。

後にそれが大きな発展を見、それを基礎として今では全国有数の消費者生協となった「市民生協（COOPさっぽろ）」を創設したのです。大きな金もうけにはならないけれど、これは「商売」の一端であり、先祖近江商人の商才を発揮したと言えないでしょうか。

## 12. ボランティア

新一郎は父安次郎に似て気前がいい方であり、ボランティア精神も旺盛でした。



写真1 学生時代からの親友東 隆氏（右）とともに。北大農学部学生の1925（大正14）年頃



写真2 錚々たるメンバーの「コックリ会」の賑わい。新一郎は前列中央、左は妻とき（1982（昭和57）年）

とくにそれが発揮されたのは、新渡戸稲造博士が創設し、校長を務めた「札幌遠友夜学校」の場です。

昭和初期からそこで教員を務め、最後の校長である半澤洵北海道大学名誉教授の下、昭和19年の閉校の手配に力を注ぎ、以後も顕影組織（札幌遠友会）の結成、遠友夜学校記念室（遠友夜学校の跡地に札幌市が設置した市立勤労青少年ホームと併設）の開設、校史の編纂など、多面的に活動しました。

## 13. 友人関係

私が知る限りでも交友関係はきわめて広いので、ほんの断片をお話するに止めます。

- ① 帯広時代の友人は帯広から札幌に出て来た同期や後輩から多数おり、分厚いものがありますが、中でも「加森観光」や「六花亭」の創設社長との親交を思いだします。
- ② 札幌一中時代では、私にはとくに具体的な人の名が浮かんでこないのですが、札幌一中・南高の「六華同窓会」の役員を長年務めていることから交友はかなりあったのではないのでしょうか。
- ③ 北海道帝国大学学生時代では、農業経済学科の同級生、東 隆氏（後の右派社会党衆議院議員）との長年にわたる付き合いが特に印象的です（写真1）。
- ④ 北海道帝国大学助手・助教授時代では、農業経済学科の同僚であり、天下の秀才と謳われた荒又 操氏がまず思い浮かびます（ご子息は経

済学部で私の先輩-後に公立釧路大学学長-荒又重雄氏)。しかし、氏は病魔に襲われ早逝してしまわれました。

- ⑤ 世に出てからですが、これこそ収集がつきませんので二つに留めます。

一つは「狐狗狸会」(コックリ会)の結成です。父には河野広道氏、更科源蔵氏など多くの郷土史研究仲間がおりましたが、その有志が高倉新一郎宅に定期的集い「飲み会」をはじめたのが、「コックリ会」です。私はその時ご馳走の運び係でしたが、これはやがて外で開くようになり、北海道の「文化人サロン」的な存在となりました(写真2)。

もう一つは「桑園大学村」の「村会」です。私の住む現在地は、当時北海道帝国大学の教授が集中して居を構えていて「大学村」と称せられ、その一郭になぜか高倉安次郎が入り込んだのです。その当時から宮部金吾、高岡熊雄、半澤 洵などの大先生がたが定期的に「村会」を開いており、長い歴史を経て来たものです。父も学者になり、最新参、最年少の会員に加えていただきました。ですから「交友関係」の中に入れるのはおこがましいかもしれません。

### 総合すると

以上あまり脈略なくいろいろな角度から捉えてきましたが、それらをくくって言えそうなことを、あえて申し上げます。

一言でいえば、相当強健、強運の持主でそれに努力家とおおらかな性格が結び付いて人生を切り開いてきたということでしょうか。

高倉新一郎は研究者にありがちな蝸壺的専門家ではなく、広く周囲を見渡し行動して行くやり方が、社会に受け入れられたのだと思います。

それが、公職を見ても、大学界では北海学園大学をはじめ複数以上の大学の学長に押され、北海道大学でも三つ部局の部長を務めました。さらに北海道の組織でも北海道開拓記念館長、北海道地方労働委員長等、多くの「管理職」をなんとか無難に務めることができた要因でしょう。

「父の考え方」を強く感じた言葉がありますので、最後にお話しましょう。

私の結婚適齢期に、両親と結婚相手のことが話題となり、母は「恵まれぬ環境のもとで曲折ある人生を送って来た娘は家庭に入ってもギクシャクしがちでうまくいかない」と言ったところ、父は「そういう娘を幸せにしてやるのも人生だ!」といったことです。



「コックリ会」や「村会」が開かれていた高倉旧宅。現存し、間もなく築100年(似鳥春瑠奈 絵、北海道アルバイト情報社、まち歩き Book より)

(続く)

## 特別寄稿

高倉新一郎先生小伝 - 息子が語る高倉新一郎 (第4回、最終回)  
新一郎が子孫、一族に遺してくれたもの

公益財団法人ふきのとう文庫代表理事・北海学園大学名誉教授 高倉 嗣昌

## はじめに

高倉新一郎は一族にとって出色のパイオニアと言えましょう。それは新一郎が帝国大学学生になって以来、高倉安次郎の子孫の職業をこれまでの商業(事業)中心から研究者・教育者など「専門職」に一変させたからです。

そうした視点から具体的に見て行きます。

## 1. 近親者

## (1) 妻 高倉(旧姓井村)とき

1910年、滋賀県八日市町(現東近江市)で茶屋を営む井村伊右衛門・げんの三姉妹の次女として誕生しました。高倉家と井村家は共に近江土山の出で、新一郎の祖母すまとときの祖父井村伊右衛門(先代)とは兄妹の関係であり、新一郎とときは又従兄弟同志です。

奈良の女子高等師範学校(今の奈良女子大)を目指して彦根の高等女学校(今の滋賀県立彦根西高)に進学しましたが、在学中に当時北海道帝国大学助手であった新一郎と縁談があり、1929年長途札幌に嫁いで来ました。

すぐに両親と同居するも安次郎の事業倒産の波乱に合う中、主婦として定着しましたがそれで終らず、札幌家庭裁判所の調停委員を四十年近く務め、「札幌調停協会」の女性として初めて会長になっています。晩年は、褒章や叙勲の栄にも浴し、又和歌やエッセイを作してその著書も数冊あります。

ときは、新一郎の研究生生活を六十年にわたって支えて来ましたが、特に新一郎が無頓着だった健康面には最大限の注意を払い、八十代後半まで現役の研究者を継続せしめたことは大きな功績です。

## (2) 子供

新一郎とときの間には2人の子どもが出来ました。

上は1935年にやっとできた女の子康子ですが、1939年大晦日に「自家中毒」で夭折してしまいました。新一郎・ときにとって生涯の痛恨事でした。

下は私嗣昌で、1937年12月23日「継宮明仁親王(今上天皇-執筆当時-)の誕生日」に生まれた高倉本家待望の男子であったことから嗣昌と命名したようです。

私は姉のことを全く覚えておりません。

## (3) 嫁

私の妻(新一郎から見れば嫁)は、1942年札幌生の実枝子(旧姓岩田)といい、北海道学芸大学(今の北海道教育大)卒業後、高等学校の教諭(国語)をしていましたが、退職のうえ嫁して来ました。

新婚旅行から帰ったその日から新一郎とは23年間、ときとは41年間ずーと同居し、一家の家事を一手に引き受け、お産と旅行以外穴をあけたことはありませんでした。新一郎の晩年の活躍を間接的に支え、新一郎・ときの最後を看取りました。そのかわり30才代後半から学習塾の指導者をしています。



写真1 17年続いた家族7人の生活(1986年1月)  
本の重さで書斎の床が落ち、復旧させた時の記念写真

\* タイトル「高倉新一郎先生小伝」は編集委員会による



実枝子は、新一郎と長年にわたり親交をいただいていた島善鄰元北海道大学学長の孫で、「桑園大学村一博士町」に住む先生方とも多重の関わりがあり、私とそれらの縁で結ばれました。

新一郎にとって妻と嫁は非常に近いところに居たこととなります。

#### (4) 孫

私には男・女・女の順で3人の子供がいますが、それが新一郎の孫のすべてです。

3人とも誕生からずーと一緒に暮らして来ましたので、新一郎を見て「学者」というものを体感して育って来たと思います。そのせいかな今は3人とも結婚し、職業を持っていますが、いずれも専門性の高い仕事に就いています。

長男新喜は北海道大学で刑事訴訟法を学び博士取得後、山形大学に赴任し、今は教授になっています。

新喜は祖父の道を真一文字に歩んだこととなりますが、アメリカ留学中キリスト教の洗礼を受けて帰って来ており、自分でお経ができるほどの仏教徒（曹洞宗）であった新一郎とは信仰面の方向は違います。

長女千春は理学療法士を目指し北海道大学医療技術短期大学部でその資格を取得、病院勤務を経て現在は札幌のリハビリ専門学校で教員をしています。

新一郎が死去した時、北海道大学医学部の要請により遺体を解剖しています（脳は保存）が、千春は当時同医療技術短大部の学生であり、その解剖に立ち合っております。

次女結実子はデザイナーを目指し、神奈川県相模原市にある女子美術大学を卒業、デザイン系会社に勤めた後、現在はスペースデザイナーとして東京で開業しています。

## 2. 兄弟・甥姪・その配偶者

### (1) 実姉妹

成人した兄弟は3人でいずれも女子（長女せつ、次女みち、三女ちづ）です。

3人とも北海道庁立札幌高等女学校（今の道立札幌北高）を卒業し、嫁して子を成しております。どうゆう縁だったかはわかりませんが、その配偶

者はいずれも東京・京都の帝国大学出身です。その職業は医師、官吏、会社員でしたが、姉妹がこのような配偶者に縁づいたのは、新一郎の存在も大きかったのではないのでしょうか。

### (2) 庶弟

実業家であった高倉安次郎には外に2人の男子がいました。

2人とも慶応大学に進学し、弟の方は六大学野球のエースとして活躍しましたが、急性の病気で早逝してしまいました。

兄の方は母親の実家の家督を継ぎ、工藤英一を名乗って一家を成し、卒業後は研究の道を歩みました。専門は日本キリスト教経済史で、明治学院大学の教授を務め新一郎と同じ社会経済史学会の会員でした。敬虔なクリスチャンで人望があり、とくに東京方面の高倉一族のまとめ役をはたしてくれました。

### (3) 甥姪、その配偶者

新一郎とときは又従兄弟であったことから、ときの甥や姪も新一郎と遠い血縁がありますので、一緒に見て行きます。

新一郎・ときと両方でつながっている私の従兄弟は私を除き13人いますが、女の従兄弟の配偶者を入れた男性の12人までが、大阪大学、名古屋大学を除いた五つの「旧帝国大学」か慶応大学、早稲田大学の出身者です。又その9人が医師を含む専門職・研究職に就いていまして、何らかの学会に所属する立場でした。

その専門領域は広範に及びます。とくにユニークと思われる研究をあげてみましょう。（順不同）

- ① 菊池英一（新一郎甥）最も先駆的な自動車の自動運転（工業技術院）
- ② 井村裕夫（とき甥）脳に働くホルモン研究（京都大学一後に総長）
- ③ 松浦 剛（新一郎甥）浄化膜の研究（カナダ オタワ大学）
- ④ 小田島成和（新一郎姪の配偶者）癌の基礎研究（国立衛生試験場一後に病理部長）
- ⑤ 松浦 保（新一郎甥）イタリア経済研究（慶応大学）
- ⑥ 青柳謙二（新一郎姪の配偶者）トーマスマンとカフカの研究（北海道大学後に文学部長）

### 3. 先祖の後を継いだ存在

一族の大多数が専門職・研究職一色に塗つぶされていく中、新一郎の父安次郎の歩んだ道（実業界・政界）を継いだ人物もいます。

まず実業界では、安次郎のすぐ下の弟（治助）の長男、高倉一郎です。帯広出身で神戸高商（今の神戸大学）を卒業し、三井物産に入社、系列会社のセントラル硝子の重役や東京帯広会の会長を務めました。

今一人は新一郎の甥松浦昭（第1回目で既に触れました）です。東京大学法学部を卒業し、当時の農林省に入省、順調に地位を上げ、水産庁長官・食糧庁長官を経て退官、先祖の地北海道から1983年の知事選に立候補しました。丁度2期目を迎える横路孝弘知事（後の衆議院議長）と戦って大敗を契しましたが、北海道後志の地に自民党から地盤をもらい衆議院議員になりました（間もなく難病にかかり引退）。

ところで、父は多く選挙の応援を頼まれましたが、最も印象に残っているのは、「北海道生協連」の会長の地位にある中で、北海道知事選の際、自民党推薦の堂垣内尚弘氏（当選し後に知事）を押ししたことです。多くの人から「お前の親父は何考えているのか？」と問われ、本人に質してみましたら、「なぜ生協の会長が自民党系の候補を押ししたらダメなのか？」と逆に問い返えされました。

松浦昭の場合には身内ですのでそんなことが問題になる事柄ではありません。

### 4. 新一郎を中心とした「高倉会」

「高倉会」とは広く姻族も含めた高倉一族の会



写真2 「高倉会」の賑わい（1978年11月）  
新一郎・ときの金婚お祝いの会

です。1957年に私が実枝子と結婚し、新婚旅行で東京に立ち寄った折に、一族が集まって祝ってくれたのがきっかけで、新一郎・ときが上京した時（特に表彰や叙勲の時）に集まるようになりました。間もなく札幌でも「高倉会」ができ、新一郎を中心に幅を広げて継続されて来たのです。

それが松浦昭の知事立候補の時には「集票集団」のような役割を帯びました。1990年、新一郎他界の後には追悼会などもやりましたが、ほどなく自然消滅となっています。

### 5. 私が父からもらったもの

#### (1) 本題にさきがけて

これまでも触れてまいりましたが、父と私の関係は一般的な父子関係をはるかに越えたものがあります。その分、父からもらったものは大きいと言えるでしょう。私のライフステージに合わせて見てまいります。

#### (2) 幼少期

私が物心ついた時から父は学者で、学術文化の固まりのような環境があたり前だと思って育ちました。父の書齋で見つけた地図を見て、地理に興味を持ちました。

#### (3) 中学・高校時代

在学していた中学校の図書室に、父が子どもを意識して書いた「北海道の歴史」が置かれているのを見て、父の歴史家としての存在を意識し、歴史への関心も持ちました。

しかし、学業では社会科に特化してしまい、そっかしくてケアレスミステークが多いために成績があがらず、ずいぶん「不肖の子」と言われましたが、とにかく一浪してなんとか北海道大学文類に入学することができました。

高校1年生の時、特筆すべき思い出があります。第1回目で高倉安次郎の胸像のことに触れましたが、その後太平洋戦争末期に金属として供出してしまいました。台座が残っていたので、新一郎が別に胸像を造り直し、1954年に再建の除幕式をしました。私が直系の孫として除幕をしたのですが、その時ご先祖というものを強く意識する機会となったことです。

#### (4) 学生時代

3年目に学部移行があり、私はその年文類で移行点が最も高かった経済学部（父の所属学部）に行きました。周囲から特異な目で見られがちの中、私はアッケラカンとして過ごしていたように思います。

卒業学年時父は学部長退任後就職担当教官で、一応全対象学生と個人面談があったようですが、私には何の話もなく、ゼミの大爺栄一先生（経済地理学）と相談して大学院を目指すことに決めました。

#### (5) 大学院時代

大学院になると、新一郎（本人は1962年農学部配置転換）の息子であることを強烈に意識せざるを得ず、畏縮し行き詰まって、父はもとよりまわりの人々には顔向けができない修士留年の失態をやらせてしまいました。

修士の学位はもらいましたが、博士課程には進まず、指導を受けていた林善茂先生のお世話で、教育学部の社会教育講座の助手に転身しました。これぞまさに親の七光りと言えましょう。

一からのスタートでしたが、転身の最大の動機は父の影響の外に出なかったということです。

#### (6) 大学教員時代

父は北海道の社会教育界ではとくに文化行政の領域で大変有名な存在だったので驚きました。

私も社会教育領域の学習・研究を積み、対外的な仕事も増える中、直接的な関わりは少なかったのですが、父の存在を意識する機会はかなりありました。



写真3 新一郎の葬儀（1990年6月）  
花で北海道の形を描いた祭壇

私はなんとか五十才前に教授（北海道大学医療技術短期大学部）の地位を得、北海道年鑑の人名録に父のすぐ下で名を連ねるまでになりましたが、父は間もなく他界してしまいました。

#### (7) 父の他界後

父の他界後も、父と離れるどころか父の後追いのような形で人生を歩んだのです。

一つは父が創設者であるCOOPさっぽろの理事や同社会福祉基金理事長の任に就いたことです。

今一つは父が2代目学長を務めた北海学園大学に移って定年まで在籍したことです。

#### (8) 現在

私は社会教育に関連した対外的仕事をする過程で財団法人「ふきのとう文庫」に出会いました。

これは一主婦が始めた私立の全国的にはユニークなバリアフリー子ども図書館（内容は当ニュースの50号で紹介させていただいております）で、その活動内容に感銘を受け、毎年学生を連れ見学に行くうち役員（ボランティア）になり、札幌市西区から私が財団に土地を寄附した同中央区桑園の地に五年前移転して来ました。

一見父とは無関係に見えますが、それでも父から受け継いだものは大変重大です。

一つは「札幌遠友夜学校」（父が深く関わったことは既述）で新渡戸稲造が培ったボランティア精神です。私は、現在、既述の「記念室」も撤去されてしまっている「遠友夜学校」の人脈や資料等を新たに発掘・保存・公開する等を目的として最近結成された「札幌遠友会再興塾」の副会長をしています。

今一つは私が八十年近く住み「ふきのとう子ども図書館」がある現在地、「桑園大学村」の伝統的文化風土と新一郎が遺してくれた土地です。

◎この小伝を書くにあたり、北海道大学名誉教授黒柳俊夫先生（農学部で新一郎が教授を務めた農政学講座の当時の助教授）のアドバイスをいただきました。